

京林大だより

No.24



絵:卒業生 熊走君

平成27年度 林業大学校卒業式



18名の若人が林大を卒業しました



春の兆しを感じる3月10日、和知ふれあいセンターで林業大学校第3期生18名の卒業式が挙行されました。只木校長から卒業証書を受け取った学生は、林大で2年間学んだ様々な知識と技術をもとに、これから社会を担う一員として活躍する抱負に胸をふくらませていました。

卒業式終了後には、今年も和知駅前活性化委員会のみなさまからお祝いの食事を振る舞っていただきました。地元の皆さまの温かいお気持ちに心から感謝申し上げます。

多くの学生は和知の町内で下宿生活をしてきました。学校で林業を学ぶとともに、地元の方々から、きちんとあいさつをすることなど、社会人としての大事な心得を教えていただきました。ありがとうございました。卒業生にとって京丹波町は第2のふるさとです。また、街角で顔を見かけることもあるでしょう。そのときはどうぞよろしくお願ひいたします。



地元のみなさま、いつも温かいご声援ありがとうございました。お世話になりました！



林政ニュース

今月の授業参観

木材自給率を50%に！

我が国では、使える木が少ない時代には国産材の比率が20%を下回るまで減少しましたが、今は私たちの近くの森林にたくさんの木が育っています。国は、こうした資源を有効利用して木材の自給率を5割以上にしようという目標を立てました。

地元の木を使うことが、林業を盛り立てて、地域の森林を育てるのです。



「木造建築」も大事な勉強です。

『育林技術1』



山々が豊かな緑に覆われているのは、林業者が丹精込めてスギやヒノキを植え続けてきたからです。林大生も、将来の京丹波町の森林を育てるために「植栽」の実習をしました。



1本ずついいいに苗木を植えました。



校長室より

「花粉症」本当かな・・・

校長 只木良也

花粉症のシーズン。でも本当にスギは悪者？

今から50年前、花粉症を言い出したのはイギリス、続いてアメリカ、ともにスギは無い国でした。わが国で騒がれ出したのは昭和50年代、スギ人工林が増え、その管理不足が問題化し始めた時代、そこで付いた名が「スギ花粉症」。

しかし、スギ花粉はずっと昔から飛んでいました。

春なれや名も無き山の朝霞 芭蕉

「霞(かすみ)」とは、「大気中に微細粒子が増え景色がはっきり見えない現象」のこと。微細粒子は水滴が主ですが、春先の花粉も当然含まれます。芭蕉がくしゃみしながらこの句を読んだとはとても思えません。また、干した布団が黄色くなるほど花粉が飛んでいたスギ林業地帯でも、昔は花粉症などありませんでした。その中を国道など自動車道が開通するまでは・・・。

なお、ある地方病院の解析は、花粉症患者宅の分布は、スギの多い林業地帯より、国道沿いに多いとか。

「スギ花粉症」蔓延、それには何か近代的原因が想定できませんか。私はディーゼル排気ガス主因と思っています。バスやトラックなど大型車に多用されるディーゼルエンジン、その排気ガスが、人々の粘膜を刺激し、それに花粉が付着して気持ちが悪く、くしゃみする鼻汁が出る・・・。つまり、主犯はディーゼル、スギは知らずに巻き込まれ、気がついたら主犯扱いの犠牲者と思うのです。

私、名古屋大学勤務時代、スギの多い公園近くに住み、大学構内にはスギの試験林もありましたが、花粉症なし。定年退職後、市内国道沿いのマンションに転居。3年目に花粉症発症しました。人体実験成功!!。